

28 物語に登場する動物たちー夕食の献立も理科教材ー

平成4年4月、小学校に新しい教科・生活科が誕生した。小学校学習指導要領では、わずかに3ページというこの教科に関する記述の中に「身近な」という語が5回も登場する。このことは生活科の特質を表しているものであろうが、理科でも何度も出てくるし、同時に告示された中学校学習指導要領でも、「身近な」が9回、「身の回り」が6回も登場するのである。

もちろん、「身近な」や「身の回り」が登場する理科教育は、今に始まったことではない。昭和の終わりごろから、研究主題などによく見かけられるようになったものである。当時の理科教育に関するキーワードの1つと言える。確かに、遠く離れたものよりも身近なものを素材にしたほうが理解しやすいし、身につけた知識や概念を生活に生かしていくためにも重要なことであろう。

ところで、「身近な」とはどういうことだろう。広辞苑では、「身近」の意味を「自分の身に近いこと。身に近い所。身辺。」と説明している。だから、身近な植物とは、通学路で見かける草花であり、校庭の樹木や学校園、学級園で栽培しているものである。同様に、身近な動物は、学校で飼っているウサギやニワトリ、あるいは、日常見かけるスズメなどの小鳥やザリガニなど小川の生き物などであろう。そして、これらは、小学校の理科の教材として欠かすことのできないものである。

しかし、このような距離が短い存在・物理的に近い存在である身近さと共に、心情的な身近さが考えられる。それは、たとえ距離が離れていても気持ちのうえで極めて近い存在・親しみやすい存在としての身近さである。このような意味で身近だといえる植物や動物は多い。

次にあげた奈良県公立高等学校入学者選抜学力検査問題に取り上

げた生物も身近な存在である。1つ目は昭和 62 年度の夕食の献立から考える問題で、ここに出てくる生物はごく身近なものである。2つ目は、昭和 63 年度のもので、ここに登場する動物は、日本の昔話やイソップ物語に登場し、幼児期から親しんでいるものである。

1 右に示したある日の夕食の献立から、理科の学習を思い出して書いた次の文の(1)~(4)のうち、正しいものには○印を書け。また、誤っているものは_____部の語のいずれか一方を正しく書きかえよ。

	ごはん
献	イワシのフライ
立	エンドウとシイタケの煮もの
	ワカメの味噌汁

- (1) エンドウは、被子植物のなかまで、胚珠が子房につつまれた花をもっている。
- (2) イワシはセキツイ動物のなかまで、背骨を中心とする骨格をもち、胎生である。
- (3) シイタケは胞子をつくってふえる植物のなかまで、からだは菌糸でできている。
- (4) ワカメはソウ類のなかまで、根から水や養分を取り入れている。

2 下の動物の組み合わせは、日本の昔話やイソップ物語に出てくるものである。これらのうち、次の(1)~(3)に当たるものはどれか。すべてを選び、ア~エの記号を書け。

- (1) A, Bともに体温が一定に保たれており、肺呼吸をする動物である。
- (2) Aはホニュウ動物であり、Bは卵生(卵でふえる)動物である。

(3) Aは背骨をもつ動物であり，Bは背骨をもたない動物である。

ア [A：ウサギ B：カメ] イ [A：サル B：カニ]

ウ [A：ライオン B：ネズミ] エ [A：キツネ B：ツル]

.....

身近な魚類といえば，キンギョがある。そして，自然が遠のいたとはいえ，まだまだ家の近くの小川にはメダカが，池にはフナがいるという人もいる。しかし，夕食に登場するイワシも結構身近な魚類である。パン粉に包まれフライになってしまっって全体の形が見えにくいとはいっても，イワシには背骨があり，ひれがあり，といった特徴は確認できる。

ライオンは身近な動物ではない。長い間，それを見ていない。もっとも近いのが，次男がまだ小さかったときのことであり，ずいぶん昔のことである。日常的に目にかかるものではない。しかし，姿・形はすぐに思い浮かべることができる動物である。空間的には身近であるとは言えないが，気持ちの上では身近な存在なのである。

栽培されているエンドウを見たことがない，乾物になったワカメしか見たことがない，手で触れたのは乾燥したシイタケだけであるという子どもたちも多いと思う。しかし，これらはごく身近なものなのである。ウサギとカメも，サルカニ合戦に出てくるサルもカニも同様である。子どもたちにとっては友達のようなものである。

小学校の授業でも，中学校においても，このような身近なもの，具体物を取り上げ，それが無理ならば，せめて分かりやすい図を用いることが大切である。また，理科の時間は1週の時間帯の中のほんの少しの時間に過ぎないのであるから，1日24時間の中のさまざまな体験と結び付けて考えさせ，学習が終わったあとも，生活の中で学んだことを想起できるようにしたいものである。

そうしたことから、私は先輩の教えである、
「理科の時間、教室には手ぶらでいくな」
を守りたいと考えてきた。

そして、できれば実物に触れさせたい、それが無理ならば、写真を、
絵を、図を、と考えてきた。それは、植物や動物の場合も同様であり、
単なる生物名でなく日常生活の中で自分自身とかかわるものを登場
させるようにしてきた。

上の問題は、そうした体験の上にできたものなのである。

ごはん

イワシのフライ

エンドウとシイタケの煮ものワカメの味噌汁